

フエリックス・クリッゲル氏「體驗全態と心的構造」

岩井勝二郎

昭和五年十月初旬、獨逸の新國境に近くドレスラウ市にドイツ哲學會の大會に參聽した。大會は Ganzheit und Form を中心題目とし、哲學、心理學、藝術、工學、物理學、生物學等多方面の學者を網羅し、私にとり相當に印象の深い會合であつた。こゝに紹介するところのものは、其の際の Felix Krueger 氏の講演の要約である。同會誌第六卷の一部は、この大會の報告にあてられる筈であるが、いまはたゞ腦氣なる當時の記憶を辿りながら、Forschungen und Fortschritte 第六年第三十四、三十五、三十六冊にクリッゲル氏自ら記するところの概要を參考してかいた。體驗全態、心的構造の兩者は、氏の心理學、恐らくは又、その哲學にとりても、中心をなす重要な概念である。講演は實驗、供覽と共に氏一流の熱辯を以て行はれ、これに引續く質疑對論も大いに賑はつた。

私は、今の場合、たゞ昨秋、哲學會に於ていはむとしていひ及び得なかつた一部分を、これによりて補ひたいと思ふ。

いかなる種類の全態 Ganzheit も完全に定義する

ことはをろか、純粹、概念的にきめることもできぬ。しかし、普通の人間には、そのだれにでも、その人の體驗や、この體驗の部分成態に即して、比較によりて、體驗全態の何であるかを示すことができる。かくいふ體驗全態こそは、吾人が直接に體驗する、現實的な全體的存在の根本の形式である。この體驗全態から、抽象的なる分析にも俟ちて、構造論的 strukturtheoretisch に持續的な全態的心的存在の概念に進み、その上に、更に、第三には、理想的全態 Ideale Ganzheit がある。客觀的當爲がそれである。これが基礎づけと解明とは、形式的な數學の問題と共に、哲學の課題となるが、かやうな規範的課題には、經驗科學、就

中、構造心理學 Strukturpsychologie の側からの豫備的な仕事が必要である。

第一、體驗全態 Erlebnisanzheit.

一八九〇年頃から、殊にドイツ國で最も深く、心理學が、これ等の事實、關係の研究に従事した。ライプチヒをはじめ各地の實驗場でなされた多数の實驗的、ならびに比較的な研究の中、次の諸點では、その結果に一致をみた。

イ 現象的、記述的な方面では

(1) 例へば、うれしい便りに接したときの、體驗、不協和なる三音又は姿勢の知覺のやうな、自全的なる部分成態、旋律の知覺、觀念、推理作用、意志動作のやうな體驗經過、これ等はいづれも、その全態に固着したとも思はれる直接に與へられる特性を具備し、これ等の全態の特性、例へば音色

や輪廓は、その部分音や、角度や、曲率乃至は音程のやうな、それぞれの體驗に於て區別せられ得る要因、あらゆる部分的規定、個々の特徴、要因を記述したり、組合せたり、又はそれ等すべての關係を決めても、それでは盡くされぬ。

(2) かくいふ全態性又は成態性 Ganz- od. Komplexqualität 相互の間には、きはめて多様な類似、差異の關係がある。

内容的にみて、例へば和絃は、經驗せられる調和、一致等の上から、裝飾などと比べられる。

次に形式的方面では、卓出性 Abgehobenheit と内面的分節性 innere Gliederung とがある。前者は一體驗が他の體驗に對して、又は、體驗背景に對して自らを區切る程度、後者は體驗自身の内面的な分節であるが、この兩方面の變化は必しも相提携することはない。形態性 Gestaltqualität は、こゝにいふ、成態性の一種であり、分節化せられる

體驗全體の謂である。現象的には、分節がなく、形態化もない體驗や部分體驗でも、全態性の上では、きはめてハッキリとした規定を保つことがあり、その逆の場合、すなはち、全態性としてはハッキリしないのに、内面的には相當に分節化することもある。

(3)感情は、そのときどきの體驗全體に關する總體成態性であり、その體驗の音色とカリズムとかいはるべきものである。部分全態はそれが現前の體驗の總内容に近いほど、この部分全態の成態性は益々感情様になる。

(4)分節のある、形態化した成態や總體的體驗にありては、ある部分の事態が他の部分のそれに卓れて優勢である。語の初頭の文字、模様などの反復、樂節の結尾の音、あらゆる種類のアクセント更には、全體にとりて何等かの意味で大切な休止罅、などはその適例である。

(5)意味 *Bedeutung* od. *Sinn* の體驗も亦、現象的に、すでに特別なる全態、すなはちこれと相關する全態の特徴を具へる。この體驗は、直接に、深み *Tiefe* の性質によりて現はれる。價值感情や主觀的に價值あるものに向ふ努力などに於て最も明瞭にみられる。

ロ 條件及び作用關係

圓熟した動作の遂行はこの動作の部分の遂行よりも錯誤少く、實際動作者が自ら思ふよりも、正確に行はれる。體驗全體の變化は、その部分の變化よりも鋭敏に氣づかれる。

心的事象のあらゆる條件變化に對して、感情は極めて繊細且多様に動く。

體驗全體の中の、特別な性質が優勢になるときは、全態性が衰へ、逆に、全態性が優位を占めるときには、部分の特性は背景に退く。

現象的な全態性の優越には、その基礎に、機能的全態及び發生的全態優越の法則がある。

例へば、現實發生的にも、個體發生的にも、部分的規定は、通例、純粹感情の指導の下で、分節に乏しい漠然として感情様な成態から、開展する。發見や憶起や、抽象、配列、選擇等はいろいろに模索の末、多くは忽然、原始的な、分節に乏しい體験全態からあらはれる。

主觀的な錯誤、錯覺の場合には、機能的全態優越の法則が重要な役目をつとめる。この法則は又發生的にも、想像の生活に於て、遊戲的な行動や、あらゆる種類の創造的形成の際に大切である。

第二、心的構造 Seelische Struktur.

人間は、心的全態に於て活動し、この心的全態のはたらきは一時的ではなく、長く持續するのを通例とする。このことは最も明瞭には、體験の全

態性が阻止妨害せられるときに氣づかれる。あらゆる種類の罅隙、分裂、未完成、意味把握の阻止は、焦燥不安を感せしめ、これに對しては、内部より調整を求める。かくの如きは、動機の闘争を經驗する際に、特に深く體験する全態への渴望迫切 *Dring* に於て顯著に現はれる。この種の憧憬も一時的には、酩酊・陶醉にみられる如き分節なく、意味に乏しい昂揚態に於て満たされるが、その種別に即する生活全態が主張せられるためには、内部の事象が持續的に分節するにいたり、各種の器官、その機能、生得的な本能、傳統的な生活秩序などの繼承的協働に基いて、心物的な構へが生れ、心的構造がつくられる。

かくいふ心的構造は、それが感情に充ちたる體験によりて全態的に養はれる限り、たゞその限りに於てのみ存續し、活動し、發達する。他面又これが活動程度には、あらゆる部分的構造相互の間

の組織的な關聯が必要となる。

人間社會に於ける形式化、規範の成立は、これに干與する人間の構造的全態すなはち個人に於ける、又は社會殊に民族社會に於ける、部分的組織的全體的なる分節の結合によりて支持せられる。しかしながら、これ等諸形式の特別なる發達、すなはち、心的精神的生活形式の成育、崩壞は、又逆に、不斷にこれに影響する構造全體の現狀、運命にも影響する。超人格的な人間生活の組織から、精神が自主的に分離し、又は動物性衝動や、經濟、技術などが惡魔様に獨立絶對化すれば、良く成育した風俗習慣も壞される。かくては、人間の構造の中核的なるもの、すなはち、内面的な、心情内の價値の關係に動搖を來し、人間に課せられたる實在の形式としての心的構造性一般は崩壞するにいたる。

發生的な比較や分析、概念構成を外にしては一つの科學的な心理學的理解も存することなく、構造、心理學も、從て又、精神の哲學もすべて空虚であり、内容を持つことができぬ。

心的發達の研究の中で、最も成熟し、且最も貢獻するところの多いのは、いままも尙、兒童心理學であるが、近來、他の年齢や、動物、精神病者、原始人類などの研究と連絡するにいたりて、益々その効果をたかめた。

かくて得たる結果は、次の點で一致する。すなはち、發生的にみて、いかなる後期の形式も、本來、分離してゐる斷片からの合成結合によりて生れたのではなく、いつでも、分節のない全態から、分節のある高等な心的、精神的現實の形像が生ずるのである。

次に、材能及び作業研究は、心的全態の根本命題に從て方法的に成育するにいたりてより、有望

のものとなつた。

例示すれば、一群の職業系列、又は特定の職業に對して、或る個人の、適否及び適當の程度を知らうとするのに、まづ條件的に、作業させたその成績より、列位序次を立て、この序次をば、實驗法の場合のやうに、計數的に、例へば教師や専門家などの評價に由りて驗證する。おほりにプロバビリテイの法則によりて算出せられた相關係數は、主要な能力の相互の關係、すなはち、それらのもとの間の構造的な關係を明かにする。

理論上、更に一步を進めたものには、特にザンデン氏 F. Sander によりて、現實發生 *aktuelle-mentische* 法として發展せしめられた研究手續がある。

現實發生法では、體驗經過は感性的刺戟によりて起されるが、この外部刺戟の條件を次第に、段

階的に減退させ、結局、その場合に存する内部的志向性が明瞭に現はれるやうにする。被験者も内観によりて、これを知得することができる。いつでも、全態性、就中、感情が、いろいろに深みの上での區別を以て、且それに關係のある促迫を伴ひて現はれる。この全態性、この感情は觀察せられた事象に於て優勢であり、從て又研究者にとりても、方向を與へるものとなる。

終りに、人間類型、個人差、現實的な性格、乃至は人格の構成を問題とする際には、この心的構造は大切であり、近世の科學的な性格學や、心理學的類型研究は、往々にして正鵠を逸するものもあるが、一般には、皆、この概念を以て指導的な考へとする。この際、發生的にも、價值論にも、最も重要な類型は、程度の外に、種別の方に一層の注意を拂はねばならぬ。

第三、哲學に及ぼす影響

新しいドイツの全態心理學とその發展は、大部分、哲學上の問題から出立してゐるが、他面では又、多少とも、哲學や生命觀に影響する。

(1) 今日の認識論では、體驗上の所與のみが、確實な、一次的の實在性をもつといはれるが、以前と較べて、よほど純粹に且充分に記述を遂げるやうになつた今日の心理學は、この根本命題を實地に行ひ、多數の、しかも秩序のある絶對的性質を發見した。かくて、認識ならびに、それぞれの體驗についての、素朴的、自然科學的に獨斷的な模寫說を打破することを助け、更に、現象の概念に、新たなる、今までよりもハッキリした内容を與へた。體驗ならびに、これと體系的に結合する心的構造に於けるあらゆる要因、部分規定、及び機能の關係は、すべての機械的な因果性以上に、生命現實

的なるものについての特別なる法則を指示し、この法則は、内容的にも詳細に規定せられることができる。

(2) 心的なるものに構造的なる成層があり、それが感情の深みの性質に於て經驗せられ得るとすれば、由是、哲學上のあらゆる規範についての問題は説明せられる。

快樂說や、幸福原理は、すでに次の様な確證のある事實のために亡びた。すなはち、感情に於ける深みの區別は、快不快の程度に還元することはできぬ。義務の要求も、すべての價値の闘争も、構造の概念によりてはじめて心理學的に可能なりとみとめられる。それ自身、無限に高まり得る持續的な心的構造こそは、實際に、あらゆる價値を規定するところのものである。

(3) 道徳的に要求せられて内面的なる形式化を遂げる一面に、又この形式化は、藝術家的な象徴の

形成の主要對象となり、審美的直觀本來固有の内容ともなる。

(4)形而上學も由是世界像構成の根據を得、神の理念も亦、心理學的研究に俟ちて、一層鞏固に基礎づけられる。

(昭和七年五月十五日稿)